石川島記念病院

症　例　概　要　患者：80代　女性

病名：急性肺炎

入院期間：令和8年7月上旬　～　令和8年8月中旬

経過：長女・夫と同居。令和8年7月上旬、トイレに行こうとした際に、座り込んでしまい、体動困難となり、翌日に当院を受診した。検査により、市中肺炎疑いでそのまま入院。その後、令和8年8月中旬に自宅退院となった。

内　　容

入院時は、MMSE４点と認知機能の低下を認め、指示理解の低下が著しく、能力としては軽介助レベルで可能な動作も、状況理解度によって介助量の変動があり、加えて不穏状態になると、リハビリテーション拒否や、介護抵抗によりスタッフ2名での介助を要していた。身体能力としては、右側への姿勢崩れや左優位での下肢筋力低下が見られ、下肢の可動域制限が強く、立位保持は腋窩介助を要していた。家族面談にて、「自宅へ退院し、トイレに行けるようになってほしい」との希望があり、基本動作の介助量軽減、歩行能力の獲得、トイレ動作の獲得を目指し、他職種で達成目標や現存能力の共有を行った。

リハビリでは、起立・立位保持練習を行い、歩行訓練とトイレ動作練習を行った。歩行訓練では、下肢柔軟性を高めたのち、平行棒から手引き歩行へと難易度を調整しながら、段階的に歩行形態を検討していった。途中、家族からの情報提供により、歩行器の形状と段差昇降の必要性を確認してからは、歩行器歩行、段差昇降練習を行った。トイレ動作練習では、看護師、ケアワーカーと相談し、日中のトイレ誘導回数を共有し、必ずトイレで排泄するという目標を設定した。介入当初は、排泄の訴えが曖昧であり、失禁回数も多く、誘導しても排泄が無いこともあったが、少しづつ排泄欲を自覚できるようになった。また、自宅退院に向けて、家族へ歩行とトイレ誘導の介助指導を行うことを提案した。次の日から予定を調整し、毎日日替わりで家族が来院し、介助指導を行うことができた。早い段階から介助方法を伝達し練習を行ったことで、退院時期までに本人の動作能力の向上が見られ介助量の軽減が図れ回復過程が目に見えるような形で実感することができた。このことは、本人・家族共に意欲の向上に繋がった。

結果として、基本動作は、手すりを使用し、近位見守りで遂行可能となり、歩行器歩行で自宅内を移動することができるようになった。トイレ動作においても、トイレでの排泄が可能となっただけではなく、下衣操作の協力動作が増え、介助量の軽減を図れた。認知機能面は、MMSE５点と机上評価での変化はないものの、口頭での指示理解度は向上し、介助時の意思疎通が容易となった。主疾患であった肺

炎は、医師による服薬管理、点滴加療により改善。そして、主治医より自宅退院が可能であると判断、本人と家族念願であった自宅退院を果たした。

本症例において、「自宅退院」という目標に向かって、OurTeamでできる動作能力の向上に取組み、家族への介助指導や献身的な協力により、自宅での受入体制を整えられたことで、自宅退院という目標を達成できたと考えられる。

【他職種の関わり】

医師：全身管理

看護師：起居動作時の自発的な動作の促し、排泄誘導

ケアワーカー：起居動作時の自発的な動作の促し、排泄誘導

セラピスト：リハビリ訓練、集団体操の促し、出来る動作の共有、トイレ動作練習、家族への介助指導

MSW：退院後のサービス調整、連携